B-7

動作性名詞述語文の日韓対照研究

金智賢

本発表では、日本語と韓国語における、「出発だ！」「私は反対だ」「彼が到着だ」のような、文末が「動作性名詞（「VN」）＋「だ」/「ita」」になっている動作性名詞述語文を取り上げる。この構文は、「VN だ」「VN-ita」型と「A（主体）は VN だ」「A-nun VN-ita」型でやや性質が異なり、「A が」「A-ka」が想定される場合も独立した働きを見せることから、これらを区別してそれぞれにおける観察を進める。本発表では、動作性名詞という特殊な名詞がコピュラとどのように付き合っているのかという観点に立ち、先行研究を踏まえつつ、日韓両言語の共通点と相違点をまとめる。結論的に、日本語は「VN」を確定事象として取り上げる際に動作性名詞述語文を用いるが、韓国語では「VN」が確定事象の時間又は場的なリスト（事象スキーマ）に基づいていなければこの構文が使えないことを論じる。さらに、以上の相違は、日韓コピュラ形式の述語性の違いによるものであることを主張する。

1．はじめに

本発表で言う動作性名詞（「VN」）とは、「する」「hata」が付いて動詞になる名詞で、「＋コト性」「－モノ性」（寺村 1968）の名詞を指す[1]。動作性名詞述語文は、「VN」の主語である「A」が現れない「VN だ」「VN-ita」型の文と、「A は VN だ」「A-nun VN-ita」型の文、及び、「A が VN だ」「A-ka VN-ita」型の文に分けてみることができる。以降、日本語と同様の韓国語文がある場合はローマ字表記で示し、韓国語の例文は下段に日本語の逐語訳を示す。

（1）a. 出発だ!
chwulpal-ita!
b. いよいよ上海へ出発だ！
tutie sanghai-lo chwulpal-ita!

（2）a. 私は反対だ。
na-n pantay-ta.
b. 私はその意見に反対だ。
na-n ku uykyen-ey pantay-ta.

（3）a. 田中さんが到着だ。（益岡 2000）
b. プロ注目の選手が優勝に貢献です。

動作性名詞述語文がこれらの基本型コピュラ文と異なるのは、問題の「VN だ」を「VN する」など動詞形にしても不自然ではなく、意味も変わらないということである。動詞文にしても意味が変わらないということは、これら動作性名詞述語文が本質的に、述語名詞の有する動詞性を具現するものであることを示唆する。そこで浮かび上がる疑問は、動詞文でも問題がないにも関わらず、（1）～（3）がコピュラ文の形をとるのはなぜかということである。本発表では、このことに焦点を当て、動作性名詞述語文の動詞文と異なる特徴を追究しつつ、その特徴における日韓両言語の共通点と相違点を探っていく。

2．先行研究

従来、動作性名詞述語文は、ウナギ文とともに周辺的なコピュラ文として扱われることが多かったようである。高橋（1984：30）は、〈動作づけ〉を担う名詞述語文の一つとして、「われわれもいよいよあす出発だ」「あっしゃもうこれっきり断然絶交だ！」のような、「する」の代わりにコピュラをつけたものを挙げており、益岡・田窪（1992：28）は、借用動詞中の名詞の部分が判定詞と結合して述語を構成することがあると述べている。南（1993）は、擬似名詞述語文としてウナギ文と動作性名詞述語文を挙げ、どちらも、述部以外の成分（主部）は動詞述語文的、述部の要素は名詞述語文的というハイブリッド的性格の構造を持つものであると説いた。益岡（2000）では、名詞述語が動作を表す例として「田中さんが到着だ」「鈴木先生がお待ちです」などを挙げ、これらは「田中さんが到着した」「鈴木先生が待っていらっしゃいます」のような動詞述語を用いた表現と同じ事象叙述の表現であるとした。以上の議

[1] 寺村（1968）は「する」がついて動詞に転化する名詞を〈動詞性〉をもつ名詞と呼び、その中から「＋コト性」「－モノ性」の「議論」のような名詞と、「－コト性」「＋モノ性」の「電話」のような名詞を区別した。本発表の動作性名詞は、動詞性をもつ名詞の一種と言える。

論では、動作性名詞述語文の存在を指摘しているものの、それ以上の詳しい分析は行っていない。一方、大島（2010）は、「もうじき列車が到着だ」という文について、「もうじき列車が到着」という動名詞の体言止め用法に、これを文らしく仕立てるための「だ」がついたものと説明しているが、文らしく仕立てるためという理由づけは、体言止めの動名詞文に「する」ではなく「だ」がつく理由の説明にはならない。このことについてまとまった説明を与えている議論に久保田（2010）がある。

久保田（2010）は、「A は VN だ」文の機能を、「VN する」文と比較することで明らかにすることを試みている。久保田は、「VN だ」の述語としての機能は〈演述〉（山岡 2000）に限定されるとし、「S（主語）が VN すること」は決定済みの事実として伝えられている点で、「VN する」とは異なるだという。さらに、「VN だ」が表す演述機能は、（４）のような〈確定事象〉の叙述機能で、ある事象が確定事象となるための要因は、計画・予定、規則、社会的な常識など客観的な要因であるとする。

（４）a. 未来時における成立が発話時以前に既に確定している事象、または、
　　b. ある条件の下でその成立が確定するような事象　　（久保田 2010：106）

久保田（2010）の「A は VN だ」に関する議論は、的を射た指摘と思われ、本発表の議論にも示唆するところが大きい。特に、動作性名詞述語文が確定事象に基づいているとした点は注目すべきであろう。他方で、話し手が何を確定事象と判断するのかという点では、再考の余地があると考えられる。このことは、日本語と韓国語を対照分析したときにより顕著である。以降は、日韓の「VN だ」「A は VN だ」「A が VN だ」型の文を、順に対照分析していく。

３．日韓の動作性名詞述語文

３．１．「出発だ！」型の文

（１）のような動作性名詞述語文は日韓ともに自然に用いられる。（１a）と（１b）は、典型的には談話参加者が目的地に向かって出発する際に発話する表現であるが、動作主が意識される「chwulpalhanta（出発する）」とか「chwulpalhaca（出発しよう）」などの動詞文に比べると、誰か（何か）の出発という個別的な動作に言及するのではなく、これからの状況が誰かの出発を含む状況という段階に進むタイミングにあるということを述べているものと思われる。「VN-ita」及び「VN だ」のこのような用法を〈状況展開提示〉と呼んでみよう。この用法は、「sanghai-lo（上海へ）」などの表現があっても同様と見られる。（１）は場合によって聞き手への働きかけとして解釈されることもある。しかし、「VN-ita」の働きかけの意味は、「VN」が本来からもつ動作性や、その動作がこれから行われることが発話参加者に認識されているといった語用論的状況等による二次的な効果と捉えるべきであろう。このことは、すべての〈状況展開提示〉の文が働きかけの意味を表さないことからも分かる。〈状況展開提示〉は、「VN-ita」と「VN だ」に共通の意味・用法と言うことができよう。

（５）a. ca, tolkyek-ita!
　　さあ　突撃ダ
　　b. tto chwultong-ita.
　　また　出動ダ
　　c. tutie into-ey tochak-ita.
　　いよいよ　インドニ　到着ダ
　　d. （nay-ka ku pimil-ul khaylyeko 60nyen-ul chamko kitalyessta.）　icey pokswu-ta!
　　（僕ガ　その　秘密ヲ　さぐろうと　60 年ヲ　耐えて　待った）　いよいよ　復讐ダ

一方で、（６）は、（１）や（５）の「VN だ」と類似しているが、これらと違って、韓国語では動作性名詞述語文では言えない。日本語と韓国語のどちらも可能な（１）や（５）と韓国語では不可能で日本語だけが可能な（６）との違いはどこになるのだろうか。

（６）a. さあ、勉強だっ！

b. 力を抜いて、鼻で深呼吸です。
c. 表情の一つ一つにも注目です。
d. 真ん中のボタンを手前に長押しでございます。

（6）が〈状況展開提示〉の用法を有すると仮定して、（1）や（5）との違いを考えてみよう。（1）や（5）の「VN」は発話時にいきなり登場した事態ではなく、話し手の中に予め存在する一連の事態の一つであると考えられる。例えば、（1）の「出発」は、一定の時間幅のある旅程の最初の段階で、その次は移動、到着などの段階が続くことが決まっていて、話し手の中にリストとして存在する。「出発だ」という文は、発話時の状況がその決まった予定表の最初の段階であること、つまり、「（出発―移動―到着のうち）出発の段階だ」ということを表しているのである[2]。（5）も同様で、それぞれ「（突撃―戦い―終戦のうち）突撃の段階だ」「（出動―取締―帰署のうち）出動の段階だ」「（出発―移動―到着のうち）到着の段階だ」「（裏切られ―追跡・我慢―復讐のうち）復讐の段階だ」を表していると考えられる。他方、（6）の「VN」は、話し手の中にリスト化された予定表が存在するというわけではなく、「今は、勉強／深呼吸／注目／長押しをするのだ」のような感覚で、発話時における単発的な行為を表しているように見える。もっとも、このような単発的な行為も、「VN してください」などの動詞文に比べると、話し手は発話時以前に「このようなタイミングでは VN するものだ」という意識があり、発話時がまさにそれであるということを表しているものと考えられる点では、（1）や（5）と共通していると言えよう。発話時以前に働く意識とは、社会的な慣習（（6a）、（6b））や、話し手にとって定例化した場面（（6c）、（6d）、（6e））などに基づくものと見ることができる。このように考えると、（1）及び（5）も（6）も、久保田（2010）の言う〈確定事象〉と相通ずるものがある。

ところで、同じ〈確定事象〉でも、（1）や（5）の「VN」はいくぶん体系的にリスト化された予定表の事態であるのに対し、（6）の「VN」はより個別的に確定している事態で、区別が可能である。話し手の中に体系的にリスト化された予定表のことを〈事象スキーマ〉（古澤 2016）と呼んでみるなら、〈状況展開提示〉は〈事象スキーマ〉による動作性名詞述語文の用法とみなすことができる。この術語を借用するなら、日韓両言語のズレは次のように説明できそうである。要するに、韓国語で「VN-ita」型の動作性名詞述語文が言えるのは、話し手の中に〈事象スキーマ〉が存在し、その一つの段階としての「VN」に言及する時に限るが、日本語はそのような場合はもちろん、「VN」が話し手の広い通念による〈確定事象〉であれば「VN だ」が言えるのだとまとめることができる。

3．2．「私は反対だ」型の文

次は「A-nun VN-ita」「A は VN だ」の形をしている動作性名詞述語文を観察する。ここでの「A」は、「VN」の主体（動作主）を指す。「今日は勉強だ」「シートベルトは全席で着用です」など「A」が動作主ではない文は、動作主の「A は」が省略されたものか、「VN だ」型文の拡張と見ることができると考

[2] このような考え方は、先行研究にも見られる。古澤（2016）では、接客場面という特殊な状況と「です」を対象にしているものの、「ご予約様、ご来店でーす！」のようなコピュラ文が可能なのは「店への案内―客の来店―商品の提供―客の退店」のような〈事象スキーマ〉が店員同士で共有されていて、各作業にチェックを入れるようにしてデス文が発せられるのだと説明している。さらに、久保田（2019）では、「やっと自由の身だ」「（交通信号）あと数秒で赤だ」「体育祭が終わったら、受験の時間だ」のようないわゆる〈到達構文〉を取り上げ、「スケール上の、N が表す地点への到達」（久保田 2019：72）だとし、「所要表現　N だ」の形式の到達構文がスケールを作ることで、通常なら動的表現が現れる主節のコピュラ文が適正になるとしているなど、古澤の〈事象スキーマ〉と類似した議論が展開されている。古澤の例は動作性名詞述語文の一種と言え、到達構文にも「終了をクリックしたら完成です」のような動作性名詞述語文が存在することから、どちらの議論も「VN だ」が可能な理由として〈スケール〉概念を設定していることになる。到達構文では構文そのものがスケールを作っているが、接客場面や（1）のような例では、話し手の置かれた語用論的状況がスケールを形成していると言える。ところが、日本語では、スケール概念では捉え切れない（12）のような「VN だ」が存在することから、別の説明が必要そうである。

えられ、本発表で言う「A は VN だ」文とは異なる。さて、（2）及び（7）は、日本語でも韓国語でも「A-nun VN-ita」「A は VN だ」で表現可能であるが、〈状況展開提示〉では説明ができない。

（7）a. wuli pan-un cenwen hapkyek-iessta.
私たちの クラスハ 全員 合格ダッタ
b. onul-to linta-nun kyelkun-ita.
今日モ リンダハ 欠勤ダ
c. ne-n tto cikak-ilokwun.
君ハ また 遅刻ダな
d. nen icey hasen-ita!
君ハ もう 下船ダ

（2）は「私は反対する」という動詞文の意味をもちろん有するが、「賛成」と「反対」のうちのどれかというと「私の選択は反対である」という択一の意味がある。このように、他の文成分のないシンプルな「A-nun VN-ita」「A は VN だ」文が自然になるものは、「賛成／反対」「合格／不合格（脱落）」「参加／不参加」「成功／失敗」など対立する動作をもつ「VN」が多く、「A」はどちらかに当てはまるという意味になる[3]。（7 a）はこのタイプに当る。一方、（7 b）の「欠勤」は、「出勤」など対立する動作をもつ「VN」としても捉えられるが、一般的に会社という場で行われる「出勤」「欠勤（休み）」「出張」「夜勤」などの一連の動作の一つを「A」が行ったことを表すものと見ることもできる。（7 c）も、学校という場で通常起こる「遅刻」「欠席」「出席」などの事態のうち、主体の「君」が行った行為に言及していると言える。（7 d）は、発話時に成立済み、または、進行中の事態を述べている他の例に対し、まだ起きていない未来のことを述べているという点で特殊ではあるが、船上という状況で起こり得る事態の一つを「A-nun VN-ita」で表しているという意味では他の例と同様と考えられる。（7 b）～（7 d）に一貫する特徴は、発話の場において恒常的に行われる動作の選択肢があり、「A」の動作がそのうちのどれかに当てはまるということを表すのに「A-nun VN-ita」が用いられているということである。（2）や（7 a）は文脈や状況、（7 b）～（7 d）は発話が行われている物理的な場という違いはあるものの、どちらも発話の場によって設定された動さの選択肢が複数あり、そのうちの一つの「VN」を取り上げているという点では一致する。ここでは、このような「A-nun VN-ita」「A は VN だ」型の動作性名詞述語文の用法を〈択一提示〉と呼んでみよう。

〈択一提示〉が〈状況展開提示〉と異なるのは、時間の流れに沿って行われる一連の動作のリストではなく、特定の場で一般的に行われると想定される動作のリストに基づいて動作性名詞述語文が発せられるという点である。この違いは、「VN-ita」「VN だ」における「VN」は話し手が臨場する事態の中で行われる動作であるということによるのかもしれない。言い換えれば、話し手の中の動作は、話し手自身によって順序立てられやすいのである。ところが、例えば、（7 d）のような例の「下船」は、「乗船―漁業の修行―下船」のような、時間の流れに沿った動作のリストを想定できなくもない。さらに、「A」が話し手である「私は反対だ」のような例や、例えば、話し手が学校や会社に向かう途中で発する「遅刻だ」のような例における「反対」及び「遅刻」は、その場に基づく動作のリストのうちの「VN」であって、話し手の中で時系列的に順序立てられたリストのうちの「VN」ではない。このように考えると、〈状況展開提示〉と〈択一提示〉は、必ずしも明確に区別できるものではないことが分かる。両者は、社会的慣習や話し手によって発話時以前に設定された動作のリストが存在し、そのうちから「VN」を取り上げている点で、〈事象スキーマ〉による動作性名詞述語文の用法と言えよう。

ところで、日本語の「A は VN だ」文には、韓国語では表現できない（8）のような例がある。上記の説明は、（8）にも適用されるのだろうか。

（8）a. 太郎は昼寝だ。（丹羽 2005）
b. ゼンジローは家で留守番だ。
c. それとソニーは＋R側に参加ですね。
d. エンジニアは、安全ゴーグルを着用です。

[3] これら「VN」の対象は、（2 b）の「その意見に」を含め、「試験に」「大会に」「逆転に」などと、「に」（韓国語では「e」）格成分として述語の前に現れることがある。

e. 大阪の方はタイガースを応援ですか。
f. 長谷部選手は、念願のトップ下のポジションで勝負ですか。

（8a）は、太郎は何をしているかが話題なったときに発せられた文だとすれば、まず「昼寝」は、「賛成／反対」などとは違って、ある状況下で対立する動作をもつ「VN」とは言えない。さらに、時間の流れに沿った段階的な動作の一つでもない。それでは、例えば、この発話が太郎の自宅で行われたとしたら、「昼寝」は自宅という場所で一般的に行われる、リスト化された事態の一つと見なせるだろうか。見なせるという考え方もあるかもしれないが、一般的に自宅で行い得る動作というと、会社などの場に比べて定型化されないものが多く、（7）で観察した発話の場と一般的な動作の結合に比べ、「昼寝」は一般性が落ちるのも事実である。（8a）の「昼寝」は、自宅という場所で一般的に行われる動作の一つというよりは、「太郎」という人物が行い得る動作のリストの一項目と見るのが妥当であろう。ところで、「ある人物が行い得る動作」は、当然ながら、無限に近いわけで、これまで見てきた〈リスト〉とは性質が異なる。（8）のその他の例も同様のことが言える。特に、（8b）以降の例における各動作は、「VN」にかかる様々な名詞格成分によって具体的で個別的なものになっており、特定の場で一般的に行われる動作とは見なしにくい。言ってしまえば、動詞文に限りなく近いものになっているのである。動詞文とは区別される（8）の意味を〈確定事象〉に求めるなら、（8）の各文は、聞き手もある程度予想している（と話し手が考えている）「A」の動作としての「VN」を提示しているものと考えることができよう。

以上のように考えると、「A-nun VN-ita」「A は VN だ」型の動作性名詞述語文においても、「VN-ita」「VN だ」型の場合と同様なことが言えそうである。要するに、日韓両言語で自然に表現できる（7）のような「A-nun VN-ita」「A は VN だ」型の動作性名詞述語文は、話し手の中に存在する〈事象スキーマ〉の動作を「A」が行ったことに言及しており、日本語で言えて韓国語では言えない（8）の動作性名詞述語文は、「A」の動作を確定事象として表現してはいるものの、「VN」は〈事象スキーマ〉によるものではないとまとめることができる。言うまでもないが、韓国語では（8）の各文は動詞文にしかならず、名詞格成分がある場合はその傾向はいっそう強まる。以降は、議論の便宜上、〈事象スキーマ〉によらないが確定事象に基づいている（6）の「VN だ」文と（8）の「A は VN だ」文を、それぞれ〈非状況展開提示〉と〈非択一提示〉と呼んでみよう。

3．3．「田中さんが到着だ」型の文

（3）は、「A が VN だ」型の動作性名詞述語文であるが、韓国語では（3）や以下の（9）のような「A-ka VN-ita」の文は基本的に不可能と言ってよいだろう。このような日本語文は韓国語では、「A-ka VN-ita」では表現できず、動詞文にしかならない。「A は VN だ」と「A が VN だ」の相違は、当然「は」と「が」の違いに基づいているが、文の用法という面では「A が B だ」文は特殊な用法を有することが多いようである。（3）や（9）の「A が VN だ」文は、「A が VN」という事態を、事態の発生時間とは関係なく、今注目すべき確定事象として発話時に臨場させるといった用法を有しやすい。この文がニュースや記事のタイトルに用いられやすいのも、そのような特徴によるものと考えられる。このような用法を仮に〈報告〉と呼んでみよう。

（9）a. この回で飛田さん演じるズーマさんが退場です。
b. 2006 年に、戦力外から再雇用されて大活躍した小倉選手が引退です。
c. 60 代の男性がベンチプレスで 80 キロ達成です！
d. 萬田久子が、フジテレビ系で放送に、出演です。
e. そして Q3 で、STR フェラーリの 21 歳ベッテルが初ポール獲得です！

「A が VN だ」文は、大島（2010）の指摘通り、「[A が VN] だ」の構造と見ることができると思われ[4]、コピュラのつかない「A が VN」の形でも頻繁に用いられる。韓国語でも、「A-ka VN」型の文は用いられるが、その場合でも助詞（特に、対格助詞など述語に近いもの）は省略されやすく、例えば、「60 代の男性、ベンチプレスで 80 キロ達成」のように、全体的に名詞句のような構造になりやすい。言い換えれば、韓国語では、(９)のような事態は、完全な動詞文か名詞句に近い構造としてのみ表現される。このことから、〈報告〉用法の「A が VN だ」型の文は日本語特有の動作性名詞述語文と言える。

４．動作性名詞述語文におけるコピュラの述語性

これまで、日韓の動作性名詞述語文の用法を観察してきたが、ここでは、これら動作性名詞述語文におけるコピュラ「ita」及び「だ」の意味について少し考えてみたい。さきに、(２)や(７)のような「A-nun VN-ita」「A は VN だ」文についても考えてみよう。これらの文の〈択一提示〉用法は、「A」という主体と結びつく動作のリストは確定事象で、その動作とはリストのうちのどれかというと「VN」、というようにマッチングさせることだった。これは、ちょうど話し手が「ボクは（注文料理は）ウナギだ」という文を発する際のメカニズムと一致しており、用いられたコピュラの「ita」「だ」は述語的であると言える。その場合、動作性名詞述語文は「A は（やっていることは）VN だ」のような構造を考えることができるのかもしれない。

他方、(１)や(５)のような〈状況展開提示〉の「VN-ita」「VN だ」文に関しても、上述と同様の議論が可能そうである。例えば、「出発だ！」という文は、発話時以前に成立した予定表の特定の地点を確認しながら「今やることは、出発だ！」のような感覚で発話していると見ることができる。このように、「A」の部分が、言語化こそされていないものの、目で確認できるのと同じ程度に明確な場合、コピュラは述語として機能していると言えるだろう。

ところで、日本語には〈確定事象〉に基づいていながら、明確な〈事象スキーマ〉を形成しないで発話される(６)の〈非状況展開提示〉と(８)の〈非択一提示〉用法が存在した。これらの動作性名詞述語文における「だ」は、述語と見なせるだろうか。もし、これらの用法でも、確定した動作のうちから「VN」を取り出して「VN だ」と発話するといったメカニズムが認められるなら、「だ」は述語になっていると言えるだろう。ところが、〈事象スキーマ〉が想定できない以上、このようなメカニズムは非常に希薄と言わざるを得ない。むしろ、(６)や(８)では、話し手が動詞文ではなく「VN だ」文を使うこと自体が「VN」を〈確定事象〉に感じさせるといった効果につながるものと考えられないであろうか。以上の議論を踏まえると、〈非状況展開提示〉や〈非択一提示〉用法の動作性名詞述語文における「だ」は、非述語的であると言えそうである。

最後に、〈報告〉用法の動作性名詞述語文に関しては、やはり明示的な〈事象スキーマ〉はなく、「A が VN だ」と表現することによって、「A が VN」の表す事態が確定事象であるというニュアンスが伝えられていると考えられることから、「だ」は非述語的と言うことができる。以上のような考えは、「ita」は述語の用法が中心で、「だ」は述語と非述語の用法をともに発達させているとした金智賢(2017a、2017b、2018、2019）の議論と合致する。コピュラ形式が述語として用いられていると言う際、話し手は何かの概念（A）に結びつける形で別の概念（B）をコピュラ形式で取り上げる。その軸になる概念（A）は、明確に言語化されている場合もあれば、目の前の状況など非言語的要素の場合もあり、時には話し手の心の中にしか存在しないものの場合もある。逆に、コピュラ形式が非述語として用いられていると言う際、話し手は概念 A を特に意識せずに、ある概念をコピュラ形式で取り上げる。概念 A が特定しにくいほど、コピュラが述語として機能していると判断できる可能性は低くなるのである。もっとも、述語と非述語は常に明確に区別されるわけではなく、連続しているものと見るべきであろう。本発表で述べてきた動作性名詞述語文の用法と、そこに用いられた日韓コピュラ形式の述語性を表に示すと以下のようである。

---

[4] この「が」は、「VN」の主体を表す中立叙述の「が」である。いわゆる総記の「が」は、本発表では取り上げない。もっとも、「A は」「A-nun」と言えるものは、基本的に総記の「A が」「A-ka」も言えると考える。

（19）動作性名詞述語文の用法とコピュラ形式の述語性

動作性名詞述語文の用法・文型		コピュラ形式	述語性	例
状況展開提示「VN だ」型	有	「ita」「だ」	述語的	「chwulpal-ita」「出発だ」
	無	「だ」	非述語的	「表情の一つ一つにも注目です」
択一提示「A は VN だ」型	有	「ita」「だ」	述語的	「na-n pantay-ta」「私は反対だ」
	無	「だ」	非述語的	「ゼンジローは家で留守番だ」
報告「A が VN だ」型	有	「だ」	非述語的	「60 代の男性がベンチプレスで 80 キロ達成です」

5．まとめ

井上・金（1998：460）は、「VN だ」文における日韓の違いについて、「日本語の「…だ」は、出来事の存在を叙述できるだけでなく、動詞相当の述語としてもある程度機能しうる。しかし、韓国語の「…ita」は、出来事の存在を叙述することはできても、動詞相当の述語として機能するところまではいかないのである」とし、「日本語では、名詞が持つ潜在的な動詞性・形容詞性が名詞述語全体に比較的容易に受け継がれるが、韓国語では困難である」（井上・金 1998：469）と結論付けている。ところで、この記述は、「VN-ita」と「VN だ」の違いの根本的な原因、即ち、両者の述語性の違いについては触れていない。さらに、「日本語の「…だ」は、（略）動詞相当の述語としてもある程度機能しうる」という記述は、「だ」が動詞の意味に関与しているという誤解を招きやすい。通常の動詞文の述語は動詞であり、「VN だ」が動詞相当の意味を有するのは当然「VN」によるものである。「だ」そのものは、話し手が心内に立てた概念（「今やるべきこと」）に、「VN」（「勉強」）を結び付けて提示しているだけなのである。なお、動詞文でも表現可能な多くの文をコピュラ文にすることは、日本語のナル言語（池上 1981）としての一特徴と言えるのかもしれない。

付記
本発表は、JSPS 科研費 17K02734 の助成を受けたものである。

引用文献

池上嘉彦（1981）『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
井上優・金河守（1998）「名詞述語の動詞性・形容詞性に関する覚え書―日本語と韓国語の場合―」『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究報告書』平成 10 年度Ⅱ、455-470
大島資生（2010）『日本語連体修飾節構造の研究』ひつじ書房
金智賢（2017a）「二項名詞文における「이다」の意味機能について―日本語の「だ」との対照分析から―」第 68 回朝鮮学会発表要旨
金智賢（2017b）「一項名詞文から見る「이다」と「だ」の意味機能」第 256 回朝鮮語研究会発表要旨
金智賢（2018）「二項名詞文の日韓対照」ワークショップテーマ『省略現象から見えてくること―「磁石」な日本語と「チェーン」な韓国語―』社会言語科学会第 42 回大会・ワークショップ、発表論文集 236-245 内 240-242
金智賢（2019）「日本語と韓国語のウナギ文について」『科研費成果発表公開シンポジウム・日韓両語の「省略」は何を語るか―言語の個別性と普遍性に向けて―予稿集』48-62
高橋太郎（1984）「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」『日本語学』3（12）、明治書院、18-39
久保田一充（2010）「「VN ダ」文の機能―「VN スル」文との比較を通して―」『日本言語学会第 141 回大会予稿集』日本言語学会、104-109
久保田一充（2019）「到達構文としての名詞文―動的事態指向の修飾表現と静的表現との結合事例―」『日本語文法』19（2）、日本語文法学会、66-82
古澤純（2016）「接客場面におけるデス文の使用条件」『日本語文法』16（2）、日本語文法学会、144-152
益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法―改訂版―』くろしお出版
益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』くろしお出版
南不二男（1993）『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
山岡正紀（2000）『日本語の述語と文機能』くろしお出版